

地球の温暖化という言葉が科学雑誌やマスコミなどに取りあげられて久しいが、私がこの言葉にふれた最初は約 20 年ほど前だったであろう。科学雑誌「子供の科学」(誠文堂新光社出版)だった。そのなかの地球の危機における特集に興味をもったのである。内容は、当時、化石燃料の大量消費による CO₂ の排出で地球が暖かくなるということ。南極の氷が溶け水面上昇によって海岸が減少したり、土地が浸水したりするというものであった。また、オゾン層の破壊、砂漠化、生きものの減少などを含め、将来地球上で大変なことが生ずるのではないかという警鐘であった。

さて、生物のなかには温暖化の影響を受けている種があることを、日本をはじめ諸外国の研究者らによって、新聞や科学雑誌などで報告されている。

野鳥は温暖化によってどのような影響を受けているかについてであるが、残念ながら私はそのような観点で取り組んでいない。そこで、いままでの情報や書物から得られた知見をもとに思うままに述べてみることにする。

野鳥は翼を持ち、自由に空を飛び、移動することができる、また、長年月による進化の過程でそれぞれの環境に適した形態に変化し、地球上に存在する多様な環境の中でそれぞれの種類が独自の形態や習性を保って適応してきた。生息地域が悪化すると、ある種の野鳥は適当な場所へ移動する。従って、どんな種類の野鳥がどれだけの数、生活しているかを調べることによって、その場所の自然の豊かさを概ね知ることができるわけであり、野鳥が自然の豊かさのバロメータといわれる所以でもある。

最近の野鳥の変化で気づくことは、ヒヨドリやアオサギ、カワウ、ハクセキレイ、ミヤコドリなどが増えてきているように思える。一方、サシバ、コアジサシ、サンコウチョウなどの夏鳥が少ないようだ。理由はいろいろあるだろう。里山の環境の変化、水質や大気などの環境の悪化、渡り鳥であれば、越冬地、繁殖地の環境変化などがあるが、温暖化の影響も考えられる。

地球の温暖化は気候変動をとめない、各地で予期しない気象変化が生じるといわれる。干ばつや集中豪雨、寒暖の大きな変化、海洋では暖流や寒流のコースが変化するなどである。このような現象は、動植物の分布に影響を及ぼし、当然それらの種を餌とする鳥類も餌を求めて移動するであろう。

昨年(2008年1月)カリガネ(カモ科)がマガンとともに三重県鈴鹿市の溜め池に渡来し、越冬した。本種は通常、シベリア南部で繁殖し、中国南部へ異動し越冬する種である。なぜ、本来のルートからはずれて日本のこの地に現れたのだろうか。日本では時々、北陸や日本海側で、マガンに混じって数羽程度が確認される

ようだが、今回鈴鹿市で7羽のカリガネがマガン2羽とともに越冬したのは大変珍しいことである。

私は本種が当地に渡来した時からいなくなる3月20日頃まで、野鳥仲間とともに観察を続けた。また、渡ってきた前後の気圧配置図をインターネットで探してみた。そうすると、通常往来するルートの越冬地である中国大陸南部の当時は大雪に見舞われ、寒波によって多くの死者まで出たとのことであった。推測すると、通常の越冬地へ目指す越冬地が大雪のため方向を見失って、たまたま当地へきたのではないかと考えた。しかし、今年度は当地への渡来はなかった。

果たして地球の温暖化による影響かどうかわからない。

以下に地球温暖化の影響ではないかと思われる情報をあげることにする。

渡り鳥 温暖化の危機（1997年12月 某新聞）

マガンの越冬する数が、北海道や東北地方で増加しているといわれている。これまでは、北の地域では積雪のため餌がとれず、ねぐらの確保も困難であり雪の少ない南の地域に渡来していたが、温暖化の影響であろうか、今までは降雪が少なくなった北の地方でも越冬することができるようになったわけである。サギのなかまが北上し、東北地方で繁殖

サギのなかまは分布を北へ広げる傾向があり、最近では秋田県にもコロニー（集団繁殖地）ができているとのことである。魚を主食とするサギ類が北の地方でも魚を採食することが可能になったようである。

ある種の野鳥は産卵期が早まっているとの報告がある。

イギリスのある学者はイギリスの野鳥の65種において35年前に比べて9日間、産卵期が早まっていると発表している。

北アルプスに生息する雷鳥が危ない

ライチョウは氷河期の生き残りといわれている。現在本州中部山岳地帯の標高約2、500m以上のハイマツ帯に生息しているが、気温の上昇によって、本種の生息環境であるハイマツ帯や高山植物の減少により、さらに高山へ追われ生活の場を奪われることになる。このように温暖化の影響で激減しており、絶滅の危機に向かっているとのことである。

野鳥の北上で地球温暖化の進行が明らかに

全米オーデュボン協会は2009年2月、北米に生息する野鳥が北上したり、内陸部へ移動していることが何千人の市民が観察している40年分のデータを分析して分かった。これらのことから地球温暖化が自然体系に深刻な影響を及ぼす証拠になると発表した。

いままで見られなかったある種の野鳥が、最近増加傾向にあると思われたら、また逆に今まで普通に見られた野鳥が最近見られなくなったと気づいたら、もしかして温暖化の影響かもしれないと考えてみるのも一つの見方である。だが、ただちに温暖化の影響だと速断することは慎重であったほうがよい。

身近に見られる野鳥のきめ細かい観察や調査が必要となる。野鳥の動向、ツバメやホトトギスなど渡り鳥の初認日や終認日、産卵日や孵化の日数をはじめ、増減、分布などについて継続して記録することによって、なんらかの変化を掴むことができるであろう。それらの記録を蓄積し、解析していくことが

求められる。また、調査や資料の収集にあたっては多くの協力スタッフが必要となるろう。

カリガネ（カモ科）鈴鹿市内 2008.2



鈴鹿市内に飛来したカリガネとマガン 2008.2



ミヤコドリ（ミヤコドリ科）津市安濃川にて 2008.2

